

フリータウン小児医療センターサービス向上プロジェクト（国際協力機構 JICA）

大阪赤十字病院 国際医療救援部 看護師 池田載子

派遣期間 2025 年 8 月 4 日～9 月 16 日

シエラレオネ共和国にて、小児専門病院の医療サービスの質の向上のため、短期専門家として支援活動をおこないました。派遣直前の 7 月に 2 週間当院にて、フリータウン小児医療センターの看護職、医療機器技術者、薬剤師計 10 名が研修を行っていました。研修で立案した医療の質向上のためのアクションプランの実施に向けての支援や 5S 運動などを中心に活動しました。

フリータウン小児医療センター（JMB-PCE : Dr. Julius Maada Bio Pediatric Centre of Excellence）は、昨年 10 月に救急外来と新生児・未熟児特別ケア病棟の計 22 床が開院しましたが、それ以外の病棟は今も開院されていません。開院するのに十分な医師・看護職を雇用することができない状況が続いています。

事業の対象となる看護職は約 80 名程度ですが、対象人数の少ない状況を活かし、看護のレベルを向上させ、新しい看護師が小児医療センターに就職したときに、レベルが向上したレベルが「この病院での当たり前だ」と感じてもらえるようにしたいと思っています。

昨年からは 5S に取り組んでいますが、100 円均一ショップなどで当たり前に入手できる整理整頓に使えるプラスチックボックスやフックなどは、シエラレオネではなかなか入手できない上に、あったとしても日本の何倍も値段がします。（自国で生産できないことで、輸入となり値段が高くなってしまふ）段ボールなどを利用していましたが、すぐに壊れてしまいますし、見た目もあまりよくありません。



同じように整理しても、きちんとしたボックスに整理すると全く感じが違います。

日本から少し購入してもらったものと、ようやく、安めのタッパウエアを現地で発見し購入しました。員数点検のチェックリストも作成し、毎朝 5S 状況の確認、促しを行いました。まだまだ改善は必要ですが、徐々に物品をもとに戻したりするようになりました。

何よりも、5S に関して、自分たちで行いたいことを工夫したり、意見を述べたりしてく



れるようになったことが、一番良かった点です。この理由には見た目が大きな要因ではないかと感じました。見た目がきれいだとモチベーションが上がり、きちんとともに戻そうとする気持ちになるようです。5S で物品や薬品が管理できることで、医療事故の減少や業務の円滑化につながることを実感し、自分たちで 5S-KAIZEN を継続して改善していけるようになることが最終的な

目標です。

また、7 月の当院での本邦研修の際に立案したアクションプランも着実に実施されつつあります。例えば、バイタルサイン測定や経管栄養を 2 時間毎、3 時間毎に実施する指示や計画を立てたとしても、これまでは確実に実施されていませんでした。移転する前の病院の看護レベルだと 1 週間全くバイタルサインの記録がないことも多々ありました。しかし、一目で看護ケア計画がわかるようにサインを作成、時間ごとにカラーリングするなど工夫し、ベッドサイドに掲示しています。そのことにより、確実に観察が実施されるようになってきました。そのほかにも、医療関連機器圧迫創傷（MDRPU）を予防するため、3 時間ごとの観察チェックと、予防のため短時間デバイスによる圧迫をすることなどを計画し、チェックリストも自分たちで作成しました。使用しやすいチェックリストとするために、サポートは必要ですが、より良い看護を実践するために、自分たちに欠けていることを進んで取り組もうとしています。



もう一つ今回の派遣で重点的に実施したのは、医療機器管理です。小児医療センターには輸液ポンプ、シリンジポンプ、酸素濃縮器、ベッドサイドモニター、除細動器など様々な医療機器が導入されています。しかし、医療機器の管理は決して良いものとは言えませんでした。モニターのアラームは鳴りっぱなし、使用した機器は掃除などのメンテナンスも不十分で耐用年数のはるか前に故障してしまう、間違った取り扱いで部品を壊したり、なくしてしまうなどのことは日常茶飯事でした。医療機器のデイリーメンテナンスは看護師の仕事ではないと思っている看護師も多くみられました。また、それぞれの医療機器の取扱い方も熟知していませんでした。JICA のこの事業は医療機器部門への技術支援もあり、JICA が雇用した ME のコンサルタントも、看護師に対して講義やベッドサイドトレーニング

グを実施していましたが、効果は上がっていませんでした。当院での研修でも、医療機器のデイリーメンテナンスはエンドユーザーである看護職の仕事であることを理解してもらえるように見学や体験をしてもらいました。ICUでは1人の患者に10台以上の医療機器が使用されているにも関わらず、モニターのアラームが鳴っていない静かな状況を感じてもらい、そのために看護職が行っていることを伝えたりしました。MEのコンサルタントと相談し、シニア看護師で構成されているCore Training Team (CTT) に約2日間の医療機器の実践的トレーニングを受けてもらいました。師長も含まれていましたので、その成果は早速合わられました。酸素濃縮器の使用後の清掃やフィルターの洗浄、加湿器の水の毎日の交換などが実施されるようになりました。アラームの設定も行えるようになり、アラームの対処方法も理解できるようになってきました。アラームが鳴るたびに医療機器技術者を読んでいたのですが、その回数も激減してきました。また、医療機器のトレーニングをMEが行うトレーニングではなく、看護のトレーニングの一環として実施できるように、CTTのメンバーがファシリテーターとして主導で行うように計画しました。定着し、すべての看護師ができるようになるには、まだこれからですが、対応方法を理解しているシニア看護職が増えたことは大きな進歩となりました。

様々なことに取り組んでも、継続することは非常に難しいため、今後も「当たり前のこと」をしているというレベルになるまでは時間がかかります。これからも継続して支援していきたいと思います。

